

論文読解比較による「真正な学び」の過程の記述

—文章構造把握に関わる研究の時間的比較を通して—

村井 隆人・間瀬 茂夫

本稿は大学院生が複数の論文を比較し、どのように読解すると言語学における研究内容の発展を読み取ることができるのかを究明した。具体的には、文章論、テキスト言語学の論考を主な対象とし、文章構造把握に関係する研究の発展を時間的比較から捉えた。

まず、立川和美と市川孝の論考の比較を行った。その際、(a) 新しい論文における先行研究の紹介や比較、評価の記述に着目する、(b) 新しい論文の方法論などにおいて先行研究を踏襲している部分と新たに設定された部分を明確にする、(c) 新しい論文で扱われている概念について、読み手の既有知識に照らして疑問・批判がある部分に着目する、という三つの観点から読み深めを行い研究内容の発展を捉えた。

次に、より広く立川の論考の発展を捉えるために、認知心理学の文章理解研究の概説書を読解した。ここでは、文章の理解の要因を文章の要因、読み手の要因、読み方の要因の3つから捉えた。その結果、立川の論考は従来の言語学と同様、文章の要因に焦点をあてたものであり、一方で、文章理解研究が解明してきた読み手の要因についても扱ったものであると捉えることができた。加えて、文章理解研究では十分に扱ってこなかった文章の要因に焦点をあてている点に、立川の論考の意義を見出すことができた。

このように、論文比較読解においては上のような観点から読むことや、論考の位置づけを捉えるための重要な概念を理解することで、深い理解に到ることができた。このような学びの過程を明らかにすることは、学校教師が教材研究を行う際に、専門領域の論文の読解を通して学習を行う過程の解明や、それを基にした学習の支援の在り方の追求に役立つと考えられる。

キーワード：真正な学び、説明的文章、文章構造把握、時間的比較

Description of the Process of “Authentic Learning” Based on Comparative Thesis Reading Comprehension:

Temporal Comparison of Research Related to Sentence Structure Awareness

Takato Murai and Shigeo Mase

In this manuscript, graduate students' multiple theses are compared. Furthermore, the study also investigates how reading research affects its linguistic understanding. In particular, the main targets of this study were textual linguistics studies; the development of sentence structure awareness research was

temporally compared.

First, the studies of Kazumi Tachikawa and Takashi Ichikawa were compared. The research content's development was ascertained and three perspectives were employed to gain a deeper understanding: (a) a focus on the introduction, comparison, and evaluation of prior research in the new theses; (b) a clarification of sections that follow from prior research and sections that were newly established with regard to the new theses' methodology, etc.; and (c) a focus on sections for which questions/criticisms are presented by the reader's existing knowledge regarding concepts that are handled in the new theses.

Next, to understand the development of Tachikawa's study in other viewpoint, texts on sentence comprehension research in cognitive psychology were reviewed. Tachikawa's study was then considered from the three factors of sentence comprehension, the readers perspective, and the condition of reading. Therefore, the primary focus of Tachikawa's study was on the sentence factor, consistent with traditional linguistics, but could also be seen as addressing a readers perspective that had been clarified in sentence comprehension research. Furthermore, from the viewpoint of sentence comprehension research, significance of Tachikawa's study can also be seen as supplementing the sentence approach.

Thus, a comparative thesis reading from the perspectives shown above led to a deeper understanding of the key concepts involved in ascertaining the positioning of Tachikawa's study. The elucidation of these learning processes will be useful for schoolteachers as they research materials to clarify learning processes through the reading of theses in specialist areas, in addition to pursuing the ideals for teaching support.

Keywords : Authentic Learning, Expository Text, Sentence Structure Awareness, Temporal Comparison

1. 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本共同研究は、学校教師が教材研究を行う際に、専門領域の論文の読解を通して学習を行う過程の解明と、それを基にした学習の支援の在り方の探求をねらいとしている。現段階では、教師の学びを直接捉えるのではなく、大学院生の「真正な学び」の過程とその学びの支援の在り方を探っている。とりわけ今回は、大学院生が複数の論文を取り上げ、どのように読解するとその領域における研究内容の発展を読み取ることができるのかを究明することが目標となっている。

稿者（村井）は国語領域において、説明的文章の読みに関する学習指導の研究を行っている。説明的文章の教材研究を行う際には、文章構造の把握が求められる。文章構造把握の理論的根拠となるのは、言語学における文法論や文章論、テキスト言語学の知見である。

そこで本研究においては、主に文章論、テキスト言語学の論考を中心に、文章構造把握に関係する研究の発展を時間的比較から捉えることとする。具体的には、立川和美『説明文のマクロ構造把握—国語教育・日本語教育への指導・応用に向けて—』（流通経済大学出版会、2011年）と市川孝『国語教育のための文章論概説』（教育出版、1978年）の2つの論考の比較を行う。また、実際の学びにおいては、立川の論考の位置づけを把握するために教員から、文章理解研究の概説書として甲田直美『文章を理解するとは—認知の仕組みから読解教育への応用まで』（スリーエーネットワークス、2009年）が紹介された。よって、立川と市川の比較と、立川と文章理解研究の比較の2つを主な記述の対象とする。

(2) 研究の方法

論文読解比較による「真正な学び」の過程を記述するには、①読解の過程、②比較読解の過程、③全体の学びの過程の3つをどのよ

うに捉えるかを規定する必要がある。

①の読解の過程については、本共同研究では、論文の読みの過程と段階が以下のように仮説がなされている。

1. 論文そのものの読解（論文読解=構成読解）
2. 執筆者の使用する基本概念、理論による読解（使用概念読解）
3. その学問領域の基本概念、到達理論による読解（領域読解）

よって、本研究の記述もこの3つの過程に沿って行うこととするが、一論文そのものの読解を「論文読解」とすると、論文を読解する全過程と混同する恐れがあるため、以下では「構成読解」と呼ぶ。

②の比較読解の過程は、①の読解過程をそれぞれの論考で領域読解に到達したうえで比較を行うというよりは、論考を比較し読み直すなかで、特に使用概念読解、領域読解の理解が深まるのが実際だと考えられる。そこで、記述にあたっては、使用概念読解や領域読解に関する内容の比較を行う部分に焦点をあてることとする。特に、研究内容の発展を読み取るとき、新しい論文に対する次の観点からの読みが有効だと考える。

- a 新しい論文における先行研究の紹介、比較、評価の記述に着目する。
- b 新しい論文の方法論などにおいて先行研究を踏襲している部分と新たに設定された部分を明確にする。
- c 新しい論文で扱われる概念について、読み手の既知知識に照らして疑問・批判がある部分に着目する。

③全体の学びの過程について、本共同研究では、「真正な学び」の過程の解明だけでなく、学びの支援の在り方を探ることも目的となっていたことを踏まえ、全体の学びの過程を大

きく以下のように設定した。

- I 比較読解①（立川と市川の比較）
- II 教員からの指導
- III 比較読解②（立川と文章理解研究の比較）

この I から III が学びの全体過程となる。その際、学びの支援に位置づくのは II である。

以上が、①読解の過程、②比較読解の過程、③全体の学びの過程の設定である。本研究では、③の全体の学びの過程に沿いながら、比較読解の過程の記述を行っていく。その際、理解の深まりの水準は①読解の過程における仮説を用い、その際に注目した観点については②比較読解の過程における観点を併用しながら記述することとする。

なお、本稿の 1 から 4 までは村井、5 は間瀬が担当した。

2. 「真正な学び」実践の過程

(1) 学びの過程の概要と記述方法

今回の論文読解比較は次のような過程をとった。

- I 比較読解①（立川と市川の比較）
- II 教員からの指導
- III 比較読解②（立川と文章理解研究の比較）

まず、I の過程で 2 つの論考を選択した経緯について述べておく。稿者は説明的文章の文章構造把握の方法論を探求するにあたって先立って立川の論考を読んでいた。この立川の論考の中でよく参照されていた論考の 1 つが市川のものである。よって、この 2 つの論考を比較の対象とした。なお市川の論考は、修士課程においても授業で扱われたこともあり稿者自身、その内容を受容していたが、今回の比較読解においては、改めて精読をするという立場に立つ。

具体的に I の過程では、立川と市川の論考

の全体を読み、その中で中心的な内容（章）を特定する作業を行った。これは 2 つの論考が単著であり、全体を比較することが困難であるためである。その結果、立川の論考の中心と思われる第 6 章、第 7 章を取り上げ、内容を整理した。そして、その内容を立川の論考の関連する部分と比較する作業を行った。

II の教員からの指導では、教員と稿者の他に院生 2 人と学部生 1 人が参加した。稿者は立川の論考の第 6 章の内容をまとめ、それを関連する市川の論考の内容と比較し、発展したと思われる部分を記述した資料を発表した。この資料に対して院生と質疑応答をし、また教員から 2 つの論考の変遷に関するコメントと甲田の概説書の紹介を受けた。

III の過程では、甲田の概説書において立川の論考の第 6 章、第 7 章と関連する部分を特定し、立川の論考の位置づけに関する読解を行った。

以下では 2 回にわたる論文の比較を取り上げ、その学びの過程を記述する。その際、まずそれぞれの論考を論文読解の水準と使用概念読解の水準で記述する。次に主に使用概念読解の比較を行う。これによって、論文比較による領域読解の水準の記述を行う。

(2) 市川の論考の構成と中心概念の特定

1) 構成読解

まずは、構成読解の水準から市川の論考を整理し、論考の構成とその大まかな構造を確認する。市川の論考の構成は以下のようになっている。

- 第一章 文章論と文章指導
- 第二章 文章と文章の分類
- 第三章 文脈展開の形態
- 第四章 文から文へ
 - 文の接続と配列—
- 第五章 段落と段落との関係
- 第六章 文章の構成

第七章 文章表現の様相

第一章では、「国語教育の体系の中に、文章指導を効果的に取り込むためには、文章の学問的研究（文章論）と、その実地への適用の考察が前提となる（p.11）」とあるように、国語教育において、文章に関する指導を行う際には、文章論の知見が必要となることを指摘している。ここから、各章は単に文章論を展開するのではなく、その知見の教育への応用を強く意識したものであることが読み取れる。

また第一章において市川は、国語学における文章研究の必要性（と国語教育との関連）を提唱したのは時枝誠記であることを確認し、文章論の研究内容を以下のように示している（p.11）。

- (1) 文章とは何か。
- (2) 文章はどのように分類されるか。
- (3) 文と文とは、どのような語句で関連づけられるか。
- (4) 文と文とのつながり方には、どんな種類があるか。
- (5) 段落はどのようにして成立するか
- (6) 段落と段落とのつながり方には、どんな種類があるか。
- (7) 文章全体はどのように構成されるか。

ここで示されている7つの問いは、第一章以降の章の中心的な内容に対応していることが読み取れる。

このように、市川の論考の構成は文章論の問いに答える形で論を展開しており、なおかつ、文章論の知見を国語教育にどのように反映させるか、という問いに答えていく過程でもあると捉えることができる。

2) 使用概念読解

ここからは使用概念読解の水準から市川の論考の中心的な概念を確認する。とりわけ、比較する立川の論考と関連する概念を扱う。

まず市川は、自身の文章論の位置づけを明確にしている。文章論においては、文章と文法論の関係についていくつかの立場があることが示される（pp.16-18）。すなわち、文章論を文法論の領域として認める立場や、文法論の対象外とする立場である。市川自身は「少なくとも、文と文との関係の考察（文接続論）は、文法論に含めることができると考えられる（p.18）」と述べ、それ以上のレベル（段落相互の関係など）については文法論的に扱うのは困難であり適さないとしている。

市川はこのような立場から論を展開していくが、とりわけ特徴的な概念であり、立川も用いている「接続」と「配列」「文段」「統括」の4つの概念について整理する。

市川は前後の文の接続関係において、「文と文との論理的关系そのものを、「文の接続関係」と呼ぶ（p.89）」と述べている。これは接続する文の関係を接続語句といった形態的指標から捉えるものであり、以下の類型が示されている。

- | | |
|---------|------------------|
| 論理的結合関係 | ：(1) 順接型、(2) 逆接型 |
| 多角的連続関係 | ：(3) 添加型、(4) 対比型 |
| | (5) 転換型 |
| 拡充的合成関係 | ：(6) 同列型、(7) 補足型 |
| | (8) 連鎖型 |

例えば、順接型では、「雨が降った。だから、傘を持っていこう。」のような文が考えられる。このうち、連鎖型は、「夏休みには北海道を旅行したいと思います。だれかいっしょに行きませんか。（p.93）」のように接続語句が用いられない類型である。市川は、この文の接続関係を段落の関係に準用できるとし、段落と段落との関係にも接続論を適用している（p.128）。

市川は、文と文の展開について、接続という文の論理的关系への着目以外に、「それぞれの文の内容や形態を踏まえた上で、文相互の

配置のあり方」を考える必要もあるとし、それを配列的観点と呼ぶ(p.104)。文の配列関係は接続関係と比べると、より具体的な関係を扱うものである。例えば、「熱はほとんどありません。ですから、あまり心配することはないでしょう。(p.105)」という文は、「断定」(一文目)のあとに「推量」(二文目)が位置づく、と捉えられている。接続と同じく、市川は文の配列も段落相互の関係に準用できるとしている。例えば、「内容の相互関係からみた配列」としては以下のような配列が紹介されている。

- (1) 対置的關係：列挙や対照
- (2) 相対的關係：漸層や漸減
- (3) 対応的關係：原因と結果、提示と根拠など

このように文と文の関係や段落と段落の関係を考えていくとき、段落において、「内容上の統一と、形式上の改行とが合致」しない場合がでてくる。そこで、市川は「文段」という用語を用いる。「文段とは、一般に、文章の内部の文集合(もしくは一文)が、内容上のまとまりとして、相対的に他と区別される部分である(p.126)」と定義されている。また市川は段落の内部では、段落における中心的内容を端的に述べている「中心文」(トピックセンテンス)がみられることがあるとしている(p.127)。

最後に「統括」について確認する。文章を段落相互の接続・配列から捉えることや、文段を認定してくことは、文章の構成や構造を把握していくことでもある。市川は、これを文章構成の把握とし、そのための観点として「統括」という概念を用いる。「統括」とは「なんらかの意味で、文章の内容を支配し、または、文章の内容に関与することによって、文章全体をくくりまとめる機能(p.157)」である。

統括は、統括部の有無とその位置から以下のように類型が示されている(pp.156-157)。

- (a) 統括型：ア頭括式、イ尾括式、ウ双括式、エ中括式
- (b) 非統括型

以上が、市川の論考における使用概念読解である。構成読解と照らし合わせると、文法論とのつながりが緊密な部分から、あるいは文章構成をボトムアップ的に捉える方向から論の展開を行っていることが確認できる。

(3) 立川の論考の構成と中心概念の特定

1) 構成読解

市川と同様にまずは、構成読解の水準から立川の論考を整理する。立川の論考の構成は以下のようになっている。

序	はじめに・本研究のねらい
第一章	テキスト分析の歴史的展開
第二章	テキストにおける文脈展開
第三章	国語教育・日本語教育における説明的文章
第四章	説明文のジャンル特性
第五章	説明的文章における「のだ」文の機能
第六章	説明文における「中核文」の認定＝文段認定にむけての方策
第七章	説明文のマクロ構造の認定
第八章	説明文のマクロ構造認定のケーススタディ
第九章	説明的文章にマクロ構造
結び	本研究の成果と今後の課題

市川の論考が広く文章を捉えていたのに対し、立川の論考は説明文へと焦点をあてている。そのため、第三章から第五章のように、説明的文章や説明文の概念規定やその特性を探求する章が設けられている。

ここで、立川の研究の目的を確認する。説明的文章の中の1つのジャンルである説明文は、国語教育や日本語教育の授業で、言語技術の指導を行う際にしばしば用いられている。しかし、「そのジャンル決定に対する言語学的な指標は一定とはいえず、具体的な構造分析

や系統だった構造把握の手法 (p.1) や理論に基づいた指導の具体化には課題が残る。そこで立川は、この課題に対し、「教育の方法論のための基礎的研究として、言語学、特にテキスト分析の枠組みを用いて文章の仕組みを体系的に捉えていく (p.2)」ことを主な研究の目標として設定している。この研究の展開の手順は、次のような概略で示されている (p.3)。

- ① 説明文の特徴について言語学的に検討を行い、そのジャンルの特性を探る。
- ② 文章構造把握の基礎単位である「文段」、および「中核文」の認定方法やその特性について考察する。
- ③ 本研究で考察した手法を用いて説明文のテキスト分析を行い、その構造の特性を明らかにする。

中心的な内容は②における説明文のマクロ構造把握の方法論の構築にあるとあってよいだろう。その方法論を直接に担う章は第6章、第7章である。次の(2)使用概念読解や論考の比較による領域読解の水準ではこれらの章で中心的に扱われている概念とマクロ構造把握の手順を中心に扱っていく。

2) 使用概念読解

① 文章と説明文の捉え方

ここからは使用概念読解の水準で立川の論考を整理する。まずは、立川がどのように文章や説明文を捉えているのかを確認する。

第一章で文章については、文の接続関係までを文法論で扱えるとした市川の立場を引き継いでいる。具体的には、「文相互の関係 (ミクロ) と段落構成 (マクロ) の両方を取りあげ、両者を組み合わせることで、説明文の特性を明らかにしていく。そして、前者では言語的な指標 (客観的要素) を手掛かりとし、後者ではそれに加えて人間の推論形式や読みの方策 (主観的要素) とを併用 (p.7)」としている。

続く第2章では、文章の「結束性」について述べられている。立川は日本語の文章の「結

束性」について「Halliday & Hasan (1976) はこの結びつきを“cohesion” (結束性) とし、その具体的な要素として文法的な、“reference”, “substitution”, “ellipsis”, “conjunction” と、意味的 (語彙的) な“reiteration”, “collocation” を挙げているが、これらは、日本語のテキスト分析においても応用可能である (p.13)」とする。このように文章の「結束性」は形態的指標・意味的指標の両方から捉えられるものである。立川は市川や永野 (1972) が扱った接続関係を「結束性」の一部と捉えている。

第3章では、現行の中学校・高等学校の学習指導要領を中心に、説明的文章のジャンル分けを行っている。立川は「説明文」は以下のように定義している (p.21)。

狭義：いわゆる説明的文章。説明の対象について客観的姿勢で新しい情報を提供し、読者の理解を深め、思考の深化を促す文章。

広義：狭義の説明文の他、解説文、記録文、報告文、論説文、評論文など、ある程度の主観を含む文章。

これをもとに、説明的文章のジャンルを叙述内容の「事実描写中心」と「意見・主張中心」という指標を設け、さらに細かいジャンルを位置づけている。それが図1である。

立川が以下のマクロ構造把握の対象とするのは、狭義説明文である。

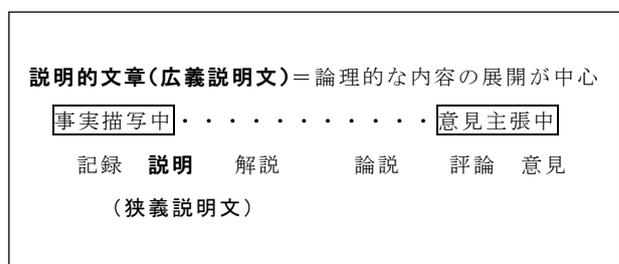


図1 立川における文章のジャンル分け

※立川 (2011, p.21) より引用。

②マクロ構造把握の手順

立川は、マクロ構造を把握するためには、「文」よりも大きく、「文章」よりも小さい中間的な言語単位を活用することは極めて有効であるとし、段落などを扱った先行研究を取り上げている。中でもいわゆる形式段落と意味段落の問題に関する研究の中で、市川が取り上げた「文段」に注目している (pp.85-86)。

そして立川は、本研究においても、文章構造を把握するために、「文段」を認め、その相互関係を利用するとする。また立川は、中心文について、日本語の文章では段落の内容を統括する中心文が複数存在したり、全く存在しなかったりする場合が多数存在するため、読解作業への応用は難しいと考える。そこで、「中核文」という新たな論理的単位を設定することで、こうした問題を解決しようとする。中核文は以下のように定義されている (p.95)。

中核文とは、文段の主題となる中心的な内容を持つ一文であり、文章の意味的指標ないし形態的指標から読み手が客観的に認定していく文である。また、中核文を含む意味内容のまとまりをもった文の集合体を文段と呼ぶ。中核文は文段決定の手段として常に存在しているが、それが顕在化している場合と、潜在している場合とを認める。

①明確に一文で中核文が存在する場合：顕在型
(中略：稿者)

これは従来一般的な中心文やトピックセンテンスと同様のものである。

②明確な形で中核文が存在しない場合：潜在型
読み手の側で、キーワードや接続詞、反復、指示表現などの形態的特徴や、意味的な特徴から類推できる内容を持つ文。言語的指標をよりどころに客観的手法によって、連続、非連続の二文以上の内容をまとめることで成立する。

また、文段については次のように定義している (p.96)。

文段は、文章と文との間に設定される言語学的根拠に基づく客観的な言語単位である。まとまった意味内容をもつ統一体で、動態的に文章構造を捉える手段となる。

立川は、文段がもつ特徴として、第一に、この単位は中核文を起点とするもので、形態・意味の両側面の指標によって客観的に認定されると述べている。また第二の特徴として、文段は個々の解釈によるぶれを回避しながら、書き手の作成した文章をよりどころに読み手によって設定される言語単位であり、理論的な方法論を構築することで、客観的に一定の共通した文段を認めることができるとしている。

また立川は、本研究における文段は、中核文を利用する点で従来の研究と方法論的に違いがあるとし、文段の認定の立場を改めて提示する (p.97)。

文段とは、筆者と読者が文章内容について、見解を共有する言語単位(意味内容のまとまり)とする。その認定の基礎となる中核文は、意味や形態のレベルで他の叙述部分と言語学的に区別が可能な単位であるため、それによって決定される文段を利用したマクロ構造の把握は、言語理論に基づいたものだといえる。そしてこうした理論に基づく手続きをふむことによって、実践への適用を考えた社会的ニーズに応える方法論を構築することを目標とする。

立川は、マクロ構造の把握を、中核文の認定と、それによる文段の把握、そして文段同士の関係を捉えることで、マクロ構造が把握できると考えている。さらに立川は、認知言語学などの先行研究について触れ、読みの過程ではトップダウンとボトムアップが同時に起こることを確認し、「中核文」の認定もまた同様の過程を通して明確な形を持つようになると予想している (pp.88-89)。

文段や中核文といったマクロ構造把握に関

わる中心的な概念を整理し、立川は具体的なマクロ構造認定の手順を次のように示している (pp.166-167)。

- [1] 中核文に基づく文段の認定
言語学的な根拠に従って、潜在型・顕在型の中核文を認定し、それによって文段を決定する。
- [2] 文段の機能の決定・接続関係による段落相互の親疎の考察・集合文段の決定
文段の機能と、それぞれの切れ続きの形態はどのようなものであるかを考える。
- [3] 文章構造の図式化
文段の機能や親疎から文段内容の相互関係を図式化する。
- [4] 文段の性質及び集合文段の配列の決定
文段相互の親疎と中核文の内容を中心に「配列」を決定して、文章構成をつかむ。
- [5] 集合文段相互の接続関係の決定
文章全体の流れをつかむことに重点を置く。
- [6] 統括部位の決定・推論形式からのマクロ構造把握
統括部位の決定と推論形式によるマクロ構造の認定を行う。

この [1] から [6] の順序は、トップダウン的な要素を含みつつもボトムアップ的なマクロ構造の把握が行われていることがうかがえる。手順の中には、接続、配列、統括部位に焦点があたっているが、ここには市川の文章論の影響がうかがえる。以下では、[1] から [6] において特徴的な概念について確認する。

[1] の中核文認定の手続きは、「Ⅰ 予測段階 (抽象的)」「Ⅱ 認定段階 (具体的)」「Ⅲ 文段の決定」の順で行われる (p.100)。ここでも、実際の読みにおけるトップダウン的な処理とボトムアップ的な処理を踏まえていることがうかがえる。「Ⅱ 認定段階」においては、〈形態的指標〉として「a 文型・キーワード・接続表現など」「b 反復表現 (同一反復と関連反

復、全体出現と部分出現)」「c 提題表現と叙述表現 (文末表現・モダリティ等)」「d 指示語」, 〈意味的指標〉として、「e 叙述の方法 (内容から判断される統括力の高さ・結束性・意味の類似性と近接性)」が挙げられている。それぞれの詳細に立ち入ることはできないので、b と e について確認する。

まず「b 反復表現」を確認する。立川は、主に馬場俊臣の反復表現に関する研究を手掛かりとしている。馬場は反復表現を形式的に判断する指標として、①反復距離：その系列に含まれる反復語彙の出現区間の長さ、②区間密度：その系列に含まれる反復語句の出現区間内での出現回数の多さ、③全体密度：その系列に含まれる反復語句の文章全体からみた出現回数の多さ、を設定する。この3つの指標をもとにすると、次のような特徴を持つ語句が考えられる。

主要反復語句：

反復距離が大きく、全体密度が大きい反復語句系列。文章全体の話題を示す可能性が極めて高く、重要度の高い系列。

部分反復語句：

反復距離が中くらいで、区間密度が大きい反復語彙系列。文章のある一部分の小話題を示す可能性が高く、文章全体から見た場合、重要度のやや高い系列。

立川は本研究における反復表現の捉え方を、以上のような馬場の研究に倣うとしている。この場合、中核文の認定には、「部分反復語句」が大きく関わると予想している (p.117)。

次に「e 叙述の方法」を確認する。立川は、意味的指標をレトリックから捉えようとしている。その中でも、特に「全体一部分」や「包摂性」をもった語句の反復を近接性と捉え、表現の **General/non-general** というレベルの差に着目する。語句の意味関係には、同一の事項を述べていても、non-general から General

へと意味レベルの変容が起こる。このような意味的に高次のレベルとなる表現は中核文の認定に利用するのである。

具体的には、池上嘉彦が、テキストの具体的な言語表現の在り方として、同意表現と包摂表現があるとしていること、また、同一性については、全く同一の表現以外に、言語外的な知識に属する事項を含んだ関係である「近接」と「類似」があるとしていることに着目し、近接性を検討していく (pp.144-145)。これは立川が、近接性をレトリックにおける「換喩」、「提喩」と関連するものと捉えているためである。立川は、国広哲弥、中村明、佐藤信夫の提喩、換喩の説明を参照し、換喩も提喩も、事物・観念という違いはあるものの、包摂的な関係を持っているといった共通性を見ることができるとし、本研究における近接性の意味関係を以下の図2のように捉えている (p.149)。

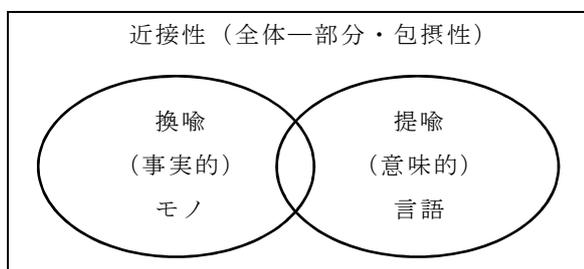


図2 近接性に関する意味関係

※1 換喩＝事実・現実的世界の隣接関係に基づく。

※2 提喩＝概念・相対的世界の上位一下位概念に基づく。

※3 立川 (2011, p.149) より引用。

立川は換喩と提喩の概念を措定し、次にこれらと General/non-general の関係に着目している。そして、換喩は基本的にモノからモノへの推移として話題の転換を成す傾向が強いとするが、より提喩的な用法になると、General/non-general の関係をとるという。また提喩は、上位一下位概念を持っているため、General/non-general の関係がみられることになる。このように、立川は、提喩と換喩は

個別の概念ではあるが、その性質はゆるやかなものであり、近接性・包摂性という大きな枠組みの中では、文脈内で上下関係を構築するという面で共通の性格をもつ意味構造だと捉えている (pp.150-151)。

そして立川は、意味レベルの相互関係を捉えるために、これまでの近接性の関係と General/non-general の関係を表1のようにまとめ直している (p.154)。

表1 表現の意味レベルの相互関係

関係	近接性・包摂性 (contiguity)			
レベル	事実・物(換喩的) ↔ 意味・言語(提喩的)			
General	主体	結果	抽象	上位語
non-general	属性	原因	具体 (特殊)	下位語

※立川 (2011, p.154) より引用。

立川は図3を用いて、「提喩は意味相互に存在する関係が明確であり、中核文認定に大きく関与するが、換喩は相互の事実が新たに作り出した関係 (論理的構造) という性格によって、中核文自身の文構成 (論理展開) を見る上で重要となる (p.155)」としている。

ここからは、[2] 文段の機能の決定・接続関係による段落相互の親疎の考察・集合文段の決定における特徴を確認する。立川は、先行研究から類似する要素を整理し、マクロ構造における文段の機能を「A開始機能」「B展開機能」「C転換機能」「D終結機能」の4つから捉える。そして、それらを、統括力の強弱と受け継ぎの方向の2点から表2のように整理している (p.179)。

表2 マクロ構造決定における文段の機能

受け継ぎの傾向	統括力が強い	統括力が弱い
後部へ受け継がれる	A開始機能	C転換機能
前部から受け継ぐ	D終結機能	B展開機能

※立川 (2011, p.179) より引用。

この機能を認定するにあたっては、主に接続関係における「切れる」接続関係に着目することで、文段の分断点の認定を援用している。具体的には市川の接続の概念をもとに接続表現の省略率について調査した佐久間まゆみの研究などから、二文の接続関係において、「転換」と「対比」が切れやすい関係であり、これを文段間の関係に応用している (p.181)。

[3] 文章構造の図式化においては、A, B, C, Dの文段の機能をもとに、文段を配置し、文段同士の論理的な関係が展開している場合は直線、同レベルで並列される場合は波線といったように、文段同士の関係や統括段落の位置を図式化する方法が示されている (pp.181-182)。

次の[4] 文段の性質及び集合文段の配列の決定においては、文段あるいは複数の文段が集まった集合文段同士の配列の類型を示している。具体的には、英文に関する文章構造の研究と、日本における同様の研究、計11の研究における文章構造の類型を整理し、以下のように整理している (p.188)。

表3 立川における文章構造の「配列」

文章構造の型	下位分類		「配列」の例
拡張型	――		列挙・対比など
進展型	相対的	時空間	時間・空間
		内容の密度	漸層・重要性など
		包摂	抽象―具体, 一般―特殊など
	論理的	因果	原因―結果など
		問題―解決	問題(疑問)―解決など
		論理	仮説―事実など

※立川 (2011, p.188) より引用。

[5] 集合文段相互の接続関係の決定においては、接続関係に関する先行研究を整理し、

集合文段間の接続関係の類型を整理している。ここでは市川や永野 (1972) などが取り上げられている。立川は、文段集合における接続関係を「論理的展開の方向を具体的に示す実際の・直接的な関係」としており、統括部位の決定に結びつくものとして捉えている。具体的な集合文段の接続関係については以下の類型が示されている。

表4 立川における集合文段相互の接続関係の類型

接続の類型	接続の下位分類	統括の傾向
(A)展開的接続	1 順接, 2 逆説 3 累加	後方統括が多い
(B)補充的接続	4 同列, 5 補足	前方統括が多い
(C)分断的接続	6 対比, 7 転換 8 連鎖	なし(もしくは前方・後方統括)

※立川 (2011, p.191, p.193) を筆者再構成して作成。

最後に、[6] 統括部位の決定・推論形式からのマクロ構造把握においては、立川は推論形式と文章の統括部位には密接な関係があるとし、中心的な推論の型を、「演繹型」「帰納型」「追歩型」としている (p.194)。

さらに、先行研究でも統括に関するものを取り上げ、代表的な統括を、「A頭括型」「B1尾括型(列挙などの)」「B2尾括型(展開が順々と続く型)」「C中括型」「D両括型」「E潜括型」の5つとする (p.197)。そして、この推論の形式と統括の関係について以下のように整理している。

表5 推論式と統括類型、論理上の決定事項の関係

推論式	統括類型	論理上の決定事項
演繹	A 頭括型	結論
帰納	B 1 尾括型	前提
追歩	B 2 尾括型	方法
帰納+演繹	C 中括型	前提
演繹+帰納	D 両括型	結論
その他	E 潜括型	多様

※立川（2011, p.198）より引用。

以上が使用概念読解の水準からの記述である。

3. 論考の読み深め

(1) 市川の論考と立川の論考の比較

ここでは、市川の論考と立川の論考を比較し、その発展内容を捉える。これは領域読解の水準にあたる。観点は次の3つであった。

- a 新しい論文における先行研究の紹介、比較、評価の記述に着目する。
- b 新しい論文の方法論などにおいて先行研究を踏襲している部分と新たに設定された部分を明確にする。
- c 新しい論文で扱われる概念について、読み手の既有知識に照らして疑問・批判がある部分に着目する。

それぞれの観点について代表的な事例を示していく。

まず a について確認する。立川は、文章の「結束性」には、形態的指標と意味的指標から把握されるものがあると紹介していた。その中で、市川の接続の種類の1つである(8)連鎖型は、省略や指示を含んだ接続であり、「間を隔てた文や、連文と文の間にも成立するものと考えられ(立川, 2011, p.15)」るため、結束性との関わりから注目されると述べている。立川が強調しているのは、テキスト

分析においては、明示的な言語的要素だけでなく、非明示的な「テキスト内での各語、各文の意味や内容に着目すること(p.15)」が必要となることである。

ここではテキスト分析の先行研究を踏まえることで、明示的な指標(結束構造)がなくとも文と文の結びつきが成立することを確認し、市川などの先行研究を捉えなおしているといえるだろう。つまり、市川らの時代においては、文の接続関係を捉える際に、意味的指標から「結束性」を捉える発想が多くはなかったことを示していると考えられる。立川による市川の論考の捉えなおしは、テキスト言語学における発展の1つであると思われる。

また、文章読解においてはトップダウン的な読みと、ボトムアップ的な読みが行われることも立川の論考では重視されていた。それは実際に、マクロ構造把握の手順のなかにも反映されている。テキスト言語学において、トップダウン的な読み、ボトムアップ的な読みというように、読み手の認知的な側面からの読みも、モデルの中に組み込もうとする点において、立川のものは、教育現場への応用を意識し、それを促そうとしていることが読み取れる。これも研究領域の広がりとして捉えることができるだろう。

続いて、b 新しい論文の方法論などにおいて先行研究を踏襲している部分と新たに設定された部分を明確にする、という観点から立川の論考を確認したい。

立川に独自の概念である中核文に着目する。中核文の認定において立川は、市川の論考など文章論の先行研究を踏襲しつつも、従来の研究では、中心文が段落や文段内の一文として顕在化されていたのに対し、意味的指標ないし形態的指標から顕在的、あるいは潜在的な中核文を捉えようとしていた。潜在的な中核文を捉えようとする点、さらに、それを意味的指標からも捉えようとする点に研究内容の発展が読み取ることができるだろう。また、

中核文を読み手の解釈によって捉えようとする背景には、認知言語学の知見を取り入れ、読みにはボトムアップとトップダウンが同時に起こることを踏まえているためだと考えられる。

また、立川の方法論としては、マクロ構造の把握における集合文段の配列や接続の捉え方に表れていたように、多くの先行研究を比較、整理し、その中から説明文に特徴的な類型を見出そうとした点に特徴があるといえる。選定された先行研究は年代的には市川と同時期の研究もあるが、それらを統一的に扱っていこうとする点に研究内容の発展を捉えることができる。拡散的になされていた研究を1つの視点から関連付けていこうとすることは研究を推進させる試みであるといえよう。

最後に、稿者が読み手として疑問や批判をもった部分に対する観点から立川の論考を確認する。立川の論考においては、概念に関する誤解がみられる箇所があった。とりわけ、マクロ構造把握における〔6〕統括部位の決定・推論形式からのマクロ構造把握においては、論理構造と文章構成に関する誤解がみられる。例えば、立川は頭括型の説明文の推論形式を演繹としているが、演繹の代表である三段論法を用いた記述は結論が統括であろうと尾括であろうと推論に変化はない。このように、推論形式と文章構成は強固な相関関係を持つものではない。

このような観点による読みは、研究内容の発展を明確に理解し、領域読解の水準においてより適切な判断を下すために重要な読みだと考えられる。

以上、3つの観点から領域読解の水準に関わる読みの具体をいくつか示した。いずれの観点であっても研究内容の発展を捉えたり、研究の位置づけを明確に捉えることに役立つように思われる。

（2）教員からの指導

教員からの指導は、稿者と教員が所属するゼミの時間を用いて行われた。稿者は、この時点では、まだ立川の論考の第7章をまとめるには至っておらず、第6章をまとめ、市川の論考との比較を行った。その際には、比較読解の観点も用いた発表を行った。このゼミでは大きく院生からの質問と教員からの他の論考の紹介が行われた。

まず、院生からの質問では2つの質問がなされた。1つ目は、立川がマクロ構造の把握〔4〕において、「配列」を決定し、文章構成をつかむと記しているが、この作業には、特に「配列」の決定と文章構成との間には飛躍があるのではないか、という質問である。確かに、市川では文章構成は文段間の接続関係の決定や統括部位の決定によってなされるものであり、市川の示す手順から捉えると〔4〕の作業においては、「配列」の決定と文章構成の決定の間にはいくつかの作業が想定される。ただし、立川は市川における文章構成をマクロ構造という用語で表しており、立川における文章構成とは、集合文段の配列を決定することによって得られる文章全体の集合文段レベルの配列のありようが明確になっていることを指していると思われる。このような質疑を行うことで、立川では明確には規定されていない用語の意味を類推し、使用概念読解の水準の読みを深くすることができた。

2つ目の質問は、立川は中核文の認定において、意味的指標を用いているが、ここで類似性が重視されないのはなぜか、という質問である。確かに立川においては、類似性に属する隠喩などは、中核文の認定においては重要視されていない要素である。これは、中核文の認定においてはより抽象的な語を特定することが中核文の作成に役立つので、特に近接性に属する換喩と提喩が重視されるという回答を行った。この回答は、質問者に納得されたが、次のような意見が提出された。それ

は、中学校以上の価値主張を含む説明的文章教材においては主張のために用いられるレトリックとして隠喩など類似性に属するものもより重要視されてくると思う、というものであった。

この意見を稿者は領域読解の水準を深めるための意見として受け止めた。立川の説明文の定義で既にみたように立川は説明文を狭義の定義で用いている。これに対して、中学校などで用いる説明的文章は論説文など科学的な知識に基づく事実主張にとどまらず、価値主張をも含む教材が1年生でも確認できる。このように研究対象となる文章を捉えなおすことで、立川の研究の位置づけをより深く理解するとともに、研究の展望を捉えることもできた。

院生からの質疑応答を経て、稿者は教員から、次のような指導を受けた。1つは、1980年前後の研究においては、説明的文章の教材研究においては、接続論を中心とした文章論を背景理論として用いていたこと、その後、テキスト言語学の知見や認知心理学における文章理解モデルの知見が導入されるようになり、文章の論理というものも文章論だけでなく、意味内容といった広い範囲から捉えるようになったこと、である。このことは、市川から立川への発展の中にも確認されるものであった。立川は、テキスト言語学の知見も認知心理学の知見も取り入れてマクロ構造把握の方法論を構築しているといえた。そして、このようなパースペクティブな知識によって、この研究領域におけるパラダイムを捉える枠組みを得ることができた。

もう1つの指導は、説明的文章の教材研究の変遷を踏まえて、文章理解に関する認知心理学の知見も踏まえることで、立川の研究の発展や位置づけをより明確に捉えることができるのではないかと、という提案であった。ここで紹介されたのが甲田(2009)による文章理解研究の概説書である。以下では、立川の

論考の位置を捉えるために、甲田の概説書において参考になる部分を、主に使用概念読解の水準から捉えていきたい。

(3) 論考の比較2：文章理解研究における立川の論考の位置

1) 文章理解研究における中心概念

甲田(2009)の概説書は広く認知心理学の知見から読むという行為について解説しているものである。その中には立川も用いていたヴァン・ダイクとキンチュによる文章理解モデルなどが紹介されている。

とりわけ立川の論考の位置を捉えるために重要だと考えられるのは、「読解ストラテジー」と「文章理解の要因」である。

甲田は、「読解ストラテジー」を、熟達した読み手が、「文章の理解や学習を促進しようとする意図によって、意識的に、または無意識的に使われる動作や心理活動の方略(p.126)」と説明している。具体的な読解ストラテジーの例としては、思慮深い読み手は、読解中に、知っていることと、読解中の文章で出会う新しい情報との結びつきを探している、や自分自身の読みをモニターしている、などが挙げられている。このように、読解ストラテジーは読み手が目的に応じて意図的に行う読みの方法ということができるだろう。

また、甲田は「文章理解の要因」として3つの要因を挙げている。すなわち、文章の要因、読み手の要因、読み方要因の三者である。具体的には以下のような下位項目が示されている(pp.139-140)。

表6 文章理解の要因

文章の要因	ジャンル, 長さ, 難易度, 話題など
読み手の要因	読解のスキル, リーディングスパン, 年齢, 動機, 文化的背景
読み方の要因	読みの目的, 制限時間の有無, 読むことに伴って実行される課題 (後で質問に答えるなど)

※甲田 (2009, p.139) より引用。

読みでは以上のような要因が複雑に絡み合っていると甲田は説明している。

2) 立川の論考の位置

上にまとめた文章理解研究における中心概念は、立川の論考を捉えなおすのに役立つと考えたものである。

まず、読解ストラテジーであるが、これは読み手が目的に応じて意図的に用いる読みの方法であった。立川のマクロ構造の把握や、その下位に属する中核文の認定もこのような読解ストラテジーの1つと捉えることができるだろう。つまり、立川は説明文のマクロ構造を把握するという目的のために読み手が行うべき方法を提示したと捉えることができる。このように捉えたとき、立川の論考では、マクロ構造の把握はトップダウンとボトムアップの相互作用によって行われると指摘していたに留まっており、実際の読みではどの程度の労力が伴うのか、あるいは中核文認定に関わる指標においてどの要素を優先・重要視して読むことでより、現実的な読解ストラテジーとなるかについては充分には示されていないことがわかる。読解ストラテジーの観点から捉えると、立川の論考は、マクロ構造把握の基盤となる研究である、ということの立ち位置がより明確になるとともに、今後の研究の展望を把握することができる。

また、甲田の説明する文章理解の3要因から立川の論考を捉えなおすと、立川の論考は、特に文章の要因に焦点をあてたアプローチをしながら、読み手の要因についても方法を提

示しているものと捉えることができる。このような枠組みで捉えると、今後は読み方の要因についても取り組むことで研究が求められることが理解できる。

文章理解研究から捉えた立川の研究の展望としては、読み手にとって中核文の認定やマクロ構造把握がどの程度実行可能なものなのか、あるいはどのような訓練を必要とするものなのか、を明らかにしていくこと、が挙げられる。

一方で、甲田の概説書で説明されていたのは主に、読み手の要因や読み方の要因に焦点をあてたものであった。つまり、文章理解研究においては、文章からの要因は十分には説明できない部分であるともいえるだろう。言い換えると、立川の論考は文章理解研究において、文章の要因からアプローチを補うものであるとも捉えることができるのではないだろうか。

このように文章理解研究の概念から立川の論考を捉えることで、立川の論考の位置づけや研究の展望がより明確になった。

4. 教師の「真正な学び」への示唆

ここまで、大きく2つの論文読解比較による稿者の学びの過程を記述してきた。とりわけ、稿者が今回の学びにおいて読みが深まったと感じたのは以下の点であった。

(1) 使用概念読解の水準

使用概念読解の水準において読みが深まったと実感できたのは、一つひとつの論考の読みにおいては、理解できる範囲で批判的な読みを行ったときであった。これは立川の論考でいえば、統括部位と推論形式の関係に関する部分での指摘に該当する部分である。

また、論文読解比較においては、新しい論文と比較する論文で扱われている用語の違いを質問によって自覚的になるなど、使用概念の理解を明確にすることでより深い理解の得

られたように思われる。

(2) 領域読解の水準

領域読解の水準では、新しい論考が先行研究に対してどのような評価を行っているのかという視点に注目することや、方法論や枠組みにおいて、新しい論考が独自に構築している概念と先行研究の概念を明確に区別することで、単に使用概念読解の水準にとどまらず、その研究領域の発展性や論考の位置づけを捉えることに役立った。

また、扱われている概念の重要性に対する質問に答えようとするなかで、今後の研究の展望を捉えることもできた。

さらに、教員からのパースペクティブな知識の提供や、立川の論考を新しい枠組みから捉えることを可能にする概説書の紹介も、この水準の理解に役立ったといえる。

今後は今回の学びで示唆されたものをより精緻に捉え、教師の教材研究とその学びの支援に役立てていくための方法の模索が求められるだろう。

5. 文章構造把握の学習指導史から見た教師の「真正の学び」

国語科の学習指導において、文章構造を把握することは、読むことの学力の根幹ともいえる重要な位置を占める。しかし、日本語やその他の言語の構造や機能を探求する日本語学や言語学の研究においては、語や文の単位による研究が長く学問的な関心の中心であり、文章や談話の構造に関する研究には、学校教育において学習内容となるような定説はみられない。したがって、それらの学習指導においては、異なる起源を持ついくつかの文章構造モデルが採用される。

典型的なモデルの一つは「起承転結」である。これは漢詩（特に絶句）の構成を表すものであるが、論理的な文章のモデルとしては「転」の部分が適切ではないとされる。論理

的な文章については、「はじめ・なか・おわり」「序論・本論・結論」といった汎用性の高いモデルが、小学校中学年段階からしばしば用いられる。これらは文章全体のおおまかな構成や展開を表すもので、論理的な関係を表すものではないため、「本論」部分をどのように捉えるかは、文章の内容次第となる。こうした問題に対して、文章の表現内容に対する筆者の思考過程のパターンを反映した「認識の方法」による文章構造の把握が、教育学者によって提示され、一定の評価を得てきた。

本稿でも取り上げた市川孝らによる文章論は、言語学の一領域である日本語学の研究成果として、文章の構造把握の指導に大きな影響を与えた。上述したように規範として捉えられることの多い文章構造について、段落という単位に注目し、それらの接続関係を客観的な概念によって分析することで文章構造を把握する文章論は、説明的文章の読むことの学習指導における文章構造の把握指導の内容および方法として展開され、1970年代には説明的文章の読みの指導を定式化するに至った。むしろ、国語教育研究における説明的文章の学習指導論は、定式化された文章論的な学習指導からの脱却を図るために、発展してきた面がある。

以上の説明的文章の学習指導論史の観点から見ると、本稿における市川・立川による二つの著書の読み深めは、形式的なものとなりがちな説明的文章の構造把握の指導を改善するための基盤となる「教師の学び」の過程と捉えられるであろう。そこには次のような段階が。

まず、市川と立川の論における中心的な概念の把握である。立川は市川の論をふまえたものであるため、両者の用いる概念の共通点と相違点が理解することになるが、そうした差異を理解する過程で、言語学研究において、言語の形式的な構造に注目することが重要な意味を持つという研究の前提となる枠組みの

間瀬 茂夫 広島大学大学院教育学研究科

理解も行われている。

次に、そうした中心概念の比較から、両者に言語研究の枠組みの違いの理解へとむかっている。市川においては、言語の形式的な構造が示す意味に関心があるのに対し、立川においては、言語形式を推論を導く記号として見る見方が進み、読み手の推論へと関心が広がっていることに気づくのである。

さらに、現在の説明的文章の読むことの学習指導が依拠する認知心理学における文章理解研究と対照したことで、文章理解過程において読み手の内面において成立する意味構造と、対象としての文章の言語的構造との関係へと意識を向けるに至っている。そして、文章理解研究と、文章構造の研究との接点を見出しているのである。

国語科における読むことの学習指導においては、文章の内容や意味にばかり注目した学習指導は、言語表現と結びついた言語的能力を十分に高めることにならない。言語の形式的構造と意味構造とを関連させた学習指導が日本語の言語能力を高めることになるとするならば、こうした教師の「学び」は、言語的能力を高める国語科の学習指導を構想し、実現する基盤になるものと思われる。

参考文献

- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版。
- 甲田直美(2009)『文章を理解するとは 認知の仕組みから読解教育への応用まで』スリーエーネットワークス。
- 立川和美(2011)『説明文のマクロ構造把握—国語教育・日本語教育への指導・応用に向けて—』流通経済大学出版会。
- 永野賢(1972)『文章論詳説』朝倉書店。

著者

村井 隆人 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期